



第10回 クリエイティブCafé
アーティスト・イン・レジデンス、*OPEN*

日時：2015年9月25日（金）
18:00～20:00

会場：京都芸術センター
（京都市中京区室町通蛸薬師下る）

会費：2,000円（ドリンク＋軽食）

申込：文化庁文化芸術創造都市振興室(早川)
c-hayakawa55@pref.kyoto.lg.jp

主催 文化庁 文化芸術創造都市振興室
共催 京都芸術センター

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時には、アスリート同様に、各国からアーティストを日本に招聘し、作品制作を通じた文化交流を目指す動きがあります。そんなアーティストの受け皿としてなりうると、注目されているのが、アーティスト・イン・レジデンスです。

アーティストの滞在制作をサポートするレジデンス事業は、アーティストにとって作品制作の機会となるとともに、地域住民との交流も生まれ、地域に内在する文化資源の再発見から、新しい文化が創造され、芸術祭などによる地域再生の一翼となる可能性を秘めています。しかし、レジデンス事業を実施する自治体は徐々に増えているものの、2020年に向けた取組はまだまだ広がっていません。

では、実際に、アーティスト・イン・レジデンスでは何が起きているのでしょうか。滞在アーティストは何を思い、何を感じ、何を得たのか。レジデンス事業はどのような効果があって、何につながっていくのか。アーティスト目線を踏まえた実態を語り合います。

トークゲスト

Dylan Sheridan / Laura Hindmarsh



- 2015年 京都芸術センター×Asialink(メルボルン大学) 共同レジデンスプログラム
- ディラン・シェリダンは、オーストラリア、米国およびヨーロッパで活躍する作曲家/サウンドアーティスト。これまでコンサートホールや各種フェスティバル、ギャラリーなどで作品を発表してきた。
- ローラ・ハインドマーシュは、ビジュアルアーティストで、「多層化」のプロセスとシステムを、知覚と表現の本質への探究に用いている。
- ディランとローラは、異なるバックグラウンドを組み合わせ、伝統的・因習的な「見る」行為に対抗・挑戦する大規模なインスタレーションを創作している。今回の滞在では、「序破急」の構造のほか、能や日本の初期映画にみられる照明の美学に迫ると同時に、幻想的・退廃的な伝統のなかにみられる日本とタスマニアの共通点に迫りたいと考えている。

Rhosam V. Prudenciano Jr. / Mia Cabalfin



- 2012年 京都芸術センターレジデンスプログラム
- ロサム・ブルデンシヤド・ジュニアは、Airdance Philippinesのアソシエイト・アーティストティック・ディレクター。Kawilihan-USA Dance Troupeの主宰を務めた他、現在もフィリピンのダンスカンパニーのゲストアーティストを務める。
- 2008年、Wi-Fi Body Independent Contemporary Dance Festival 新進振付家コンペティション第2位。09年、横浜ダンスコレクションRにて「若手振付家のためのフランス大使館賞」受賞。10年にはフィリピン国家文化芸術委員による「Ani ng Dangal 2010」に選出された。パリを拠点とするダンスカンパニー・Micadanses、劇場Menagerie de Verreでコンテンポラリーダンスを学んだ他、パリ国立ダンスセンター(CND)でもレジデントとして滞在した。
- ミア・カバルフィン、2006年よりマニラを拠点とするダンスカンパニー・Airdance Philippinesのメンバーとして、多くの公演やフェスティバルに出演するほか振付も手がける。
- 08年、インパルスタイツ国際ダンスフェスティバル(ウィーン)のダンスウェブ奨学金プログラムに選出される。同年、フィリピンのダンスフェスティバル、Wi-Fi Body Independent Contemporary Dance Festival 新進振付家コンペティション・ファイナリストに選出。フィリピンのテレビ番組のプロデューサーやホストも務める。
- 今回は、Yokohama Dance Collectionで新作「Monologo」を発表するために来日。

クリエイティブCaféとは、関西でまちづくり、文化や産業などの様々な分野で、悩みを抱えながら、現場で日々奮闘している人たちが集まり、自由に語り、聴くことを丁寧に積み重ね、新たな創造へつなげるプラットフォームを形成し、課題解決を目指します。2014年度から文化庁文化芸術創造都市振興室が事務局を担当しています。